

【報告】

ビキニ被災の検証と救済

山下正寿

こんにちは。山下です。レジメのほうをご覧ください。私は元高校の社会科の教員で、「幡多高校生ゼミナール」と地域の核問題を、被爆40周年記念に調査している中で、このビキニ事件の関係者に遭遇しました。

そのとき調査で、幡多の14漁村を歩いて回ったら、すべての港に関係者がいました。ビキニ事件というのは、第五福竜丸事件と言われていたけど、足元に関係者がいるということは、一体どういうことなんだと、なぜ矮小化が今まで続いたのかということから調査を始めることになったわけです。

32年以上調査をしても、どうしても出てこない資料があります。やっと3年前に厚労省の資料が出てきました。それをきっかけに救済の活動を再開しました。被災者は当時船員保険に入っているので、マグロ漁民の船員保険の再適用の取り組みをしました。60年経っていますので、診断書を取るのに、県民病院に20回通いました。救済開示まで時間を置いたために深刻な事態になっていました。

これでは救済できないということから、裁判の方向を考えて、国の責任でこうなったのだから国家賠償請求、慰謝料を請求するというスタイルで45人の原告に参加してもらい現在に至っています。

最初にビキニ事件を映像でNHKが制作したドキュメンタリー「水爆実験60年目の真実」を5分ぐらい観ていただこうと思います。

NHK広島制作ですが、資料を求めてアメリカまで行って、アメリカの公文書館からビキニ関係の書類を見つけました。そこに今まで厚労省が発表してなかった漁船員の被災記録が残っていたのです。

〈NHKドキュメンタリー「水爆実験 60年目の真実～ヒロシマが迫る"埋もれた被ばく"～〉(2014年8月6日放送)の冒頭5分間を上映)

ビキニ水爆実験の影響で、3月～12月末までに汚染されたマグロが水揚げされた船が
高知人文社会科学研究第5号(2018)

延べ992隻です。実数は550隻ぐらいです。そのうち、高知の船が延べ270隻、実数は120隻ぐらいだと思います。主に室戸市、室戸岬町、安田町の船が中心です。

東京に入港した船が重要でして、特に3月16日、これは第五福竜丸が帰港して報道された日です。5月14日に6回目の核実験が終わって2週間で帰港したとして5月31日となります。その間に東京の築地に主に入って、検査を受け、船体に汚染があった船というのは、黒い丸を付けています。船体、魚、両方に汚染があった船が黒い丸に線が入っています。

ビキニ環礁に一番近いところが第五福竜丸、その下に第八順光丸、その右に尾形海幸丸、そして、第十一高知丸、第五海福丸。この4隻は、 20万 d/m/ft^2 、これはアメリカの測定した記録ですが、30センチ平方の粘着板に放射性降下物が付いて発生する崩壊数の単位です。それが一番高い範囲がこの 20万 d/m/ft^2 というところ。福竜丸と同じ汚染の等高線の中に4隻入っています。

船体と魚、両方汚染された船が東側に並んでいるのは、爆発した放射性降下物が風に流れて東側に行ったためです。でも、汚染の等高線は、西側のほうにも行っていて、ここにも高知の船が入っています。ただ、西側の船は放射性降下物が少なく船体汚染が大体100~500カウントが多く、東側は1,000以上で第八順光丸は3万カウントです。

放射性降下物が、船体に記録されたといっても船は洗いますので、ロープの中に入ったりとか、煙突に付いたりとか、そういう洗えないところから検出されたのがほとんどです。

星正治先生は、今、セミパラティンスク核実験の調査を続けているのですが、この星先生を代表に広島大学の放射線医学の分析チームができました。統計学の大瀧慈先生が、海上保安庁が記録している出港してから入港するまでの日付別の航路に、アメリカの核実験によって生じた放射性降下物の拡がり方、つまり等高線上に航路を結び、船のいた位置がアメリカの調査した放射性物質の汚染とどう関わっているかをシミュレーションしました。

放射線の分析のチームは、さらに被災の背景だけでなく、血液を調べる必要があるということで、血液を高知県と宮城県のほうに採取に行き、その血液を持って、血液がまだ細胞分裂している間に、写真を撮り、それを1年ぐらいかけて分析をしました。染色体が切れてそのまま戻らない状態。それから、中には、別の染色体にひつつき、コピーされている状態も含めて、染色体異常率が有意に高いと分析しました。室戸のマグロ船に乗らなかった同年代の男性とも比較しています。

歯については、エナメル質に放射線があたると組織破壊が起こる。それが何十年経つ

でも変わらないということ、岡山理科大の豊田新先生たちが研究室で分析しました。黒潮町で歯を提出した人の数値は、317ミリシーベルト、広島原爆と比較すると爆心地1.6キロに値すると言われていました。

歯の場合は、頬についた塩の影響のようです。放射線があたるということで。もちろん、塩は口にも含まれますから中の影響も出るかもわかりません。ストロンチウム90だろうと。なぜかと言うと、外側と内側に倍以上差があり、至近距離でベータ線の影響を受けているということまでわかったのです。

最近もう1人の人の前歯が見つかり、分析すると600ミリシーベルト出ました。これは高い数値ですが、前歯なので日光の影響を受ける可能性もあるということで、前例がありませんので今分析中です。人体を通じて立証する必要があるということ研究者の協力で示していただきました。

これに対照的なのは、政府の厚労省の対応です。やっと公文書を出したのですが、もちろん不十分で被災船の半分ぐらしかわかっていません。貨物船には当時は船医が乗っています。航行中に情報も入ってきますので、傘を差しなさい、雨に濡れたらいけない、ということに注意し、入港したときに体調がおかしいということに気がつきすぐに病院に連れて行って検査を受けました。白血球とか、赤血球とかの異常が見られる船員はさらに検査入院させました。

その中の一つが神通丸で、放射能症の疑いのある者が4名、放射能症を疑わせるが他の疾患もある者が3名出ています。そして、精密検査を要するのが7名で、計14名。体調が非常に良くない。今後も十分経過観察する必要があると書いています。これは、船員保険の担当をした病院長が書いた記録です。

もう一つ、弥彦丸という貨物船も入港して、これは高知の山本医師が乗船して、症状が深刻な人6名を岡山大学病院に入院、検査し、「放射線障害の疑い」という診断をされるのです。その報告書もあります。

そして、第十三光栄丸という漁船ですが、当時で言えば、第五福竜丸の次に注目された船です。神奈川の船ですけど。この船に乗っていた船員は、国立久里浜病院というところで精密検査を大体2回、血液検査と尿検査をやって、ちょっと重症だと思われる人は3回検査をうけました。

最初、厚労省は真っ黒塗りにして出してきたので、検査記録は秘密事項じゃない、公開すべきだということで詰めて、やっと出てきたんです。たまたまこの第十三光栄丸に乗っていた船員の2人が土佐清水市に生存していたので、2人が、自分の個人の情報を開示してくれということで請求して、詳しいデータが出ました。それを放射線に詳しい

専門の医者の方に分析してもらった結果、特に赤血球が異常で通常の40%ぐらいか、50%ぐらしかない。急激に減っているということ。しかもそれは、2人だけじゃなくて、ほぼ全員にその影響が見られる。そういう状態というのは、普通では絶対起きないということで、「放射線障害の疑い」という判断をして、厚労省に提出しているところです。

第五福竜丸だけが核実験だと思ひ、それで、慌てて帰ったのです。例えば、第十一高知丸という船は、福竜丸よりちょっと遠い。福竜丸は160キロですけど、300キロぐらいの北側だったのです。だから距離はあまり離れてないから爆発シーン、火球がボンと上がったところを見えています。しかし、核実験だと気がつかなかった。それを見たのは船長だけだったのです。福竜丸が慌てて帰っていくときに、その第十一高知丸と交差します。入れ替って、第十一高知丸が福竜丸の操業したところからさらに東側に入って、そこで20日間ぐらい操業し、その間に、3月27日の第2回の実験に遭遇しています。

だから1回だけじゃないのです。ブラボーショットというのは、広島は1,000倍で15メガトンですが、その後も13、11メガトンとかという実験が続いて、合計すると広島は3,220倍の爆発力の実験が6回で行われたわけです。船によって、どこで核実験に遭遇するかわからないのですが、厚労省が設置した研究班は、1回のブラボーショットの実験影響だけしか調べてないのです。

1回の実験のときに、10隻の船だけに絞って、あとは切り捨てているのです。第十一高知丸は、3月26日のときにアメリカの艦船に操業中に見つかり、船長と漁労長がアメリカの艦船に上がってこいということで呼ばれて、注意を受けて、「北に進路をとってすぐ帰れ」と指示を受けました。26日に指示を受けたのは、27日に2回目の核実験があったからです。そこを離れて帰ろうとしても1日でそんな遠くへ行けません。マーシャルから日本に帰るのに、大体2週間かかるのです。

1つ1つの船の操業全体を分析すればいいのですが、わざと第1回だけであとの航路は切られている。26日から先をわざと削って、科学者とは言えない研究報告を出しているのです。さらに、最大の問題は、被災船員の追跡調査をしてないということ、1人もしていません。電話も掛けてない。そして、われわれには問い合わせもありませんが、先行調査事例であるビキニの被災漁船員を分析した広島大学のチームにも、電話1本掛けていないのです。先行研究事例を無視するというのは、これは研究者としてはあり得ないことです。

研究班は厚労省の立場に立って「1.12ミリシーベルトしか被害を受けてないから心配することはありません」という結果を出した。それは、聞いた漁船員たちは怒りました。「心配することないといっても友達らは先に死んでいる。自分だっただんになって、ひど

い健康状態なのに、調査に高知にも一切来ないで、心配することありませんって、よくそういうことが言えるな」と強い抗議の声を上げました。私たちが「ビキニ核被災検証会」メンバーで、厚労省と直接面談をしてこのことを伝えました。

研究報告書とは言えない不十分な報告書であり、これを基にして、判断をすべきではないということを強調してきました。船員保険の再適用かどうかというのは普通3カ月ぐらいで決まるのですが、1年経ってもまだ出してこないのです。私たちが抗議しているということもあり、また延びると思います。科学的にはビキニ水爆実験の影響を受けていることは公文書からもわかっているはずですが、判断を出し渋っているという状況です。

今日のテーマの科学という点で言うと、この間、科学者の方と接する機会がありました。星先生は、セミパラティンスクの実験影響調査に入って大変だと思います。私たちが高知の被災船員の状況を伝えたら、「わかりました。知ったからには科学者としてやることをやりたい」ということで、協力していただきました。

血液検査をした田中公夫先生は、正月を返上してずっと血液分析して1年かけて、他人がやると見誤ったらいけないからということで、全部自分で分析してくれました。

一方で、放医研（放射線医学総合研究所）の明石真言理事と「研究班」のように、はじめから厚労省に都合の良い結論を出すための報告書を意図的に作る研究者もいます。「科学者が嘘をついたら被害者は救済されない」ということを知らなきゃいけないんです。今は福島の問題と絡んで、福島原発で事故に遭った原発労働者が担ぎ込まれました。放医研に行ったら検査をして、「大丈夫。心配ない」という結論を出しています。そういう機関です。

「がん登録法」ができて、日本中のがんの分析ができるということになるのはいいのですが、民間に洩らした場合、医者に懲役を与えるという規定があります。そして、それをがんセンターが集約した結果、最終的にこの放医研が分析するんです。なぜ、それをやるかと言うと、あちこちで放射線の影響を受けた子どもたちも含めて裁判が起こっている。裁判のときに「福島だけじゃないですよ。子どものがんは、あっちでも、こっちでもあります」というデータを出す可能性があります。そういう意味では非常に危険です。

広島、長崎原爆の問題は、非人道性が深く検証されていますけど、核実験の問題は、世界でほとんど検証されていません。マーシャルは、実験的に血液検査をアメリカがモルモットみたいに続けています。フランスは、ムルロア環礁、イギリスはクリスマス島、中国はロプノール、旧ソビエトはセミパラティンスクで核実験をやっているが、どの国

も検証されていません。

広島、長崎の原爆について訴えていっても、核保有国は動かない。いろんな理由をつけて。「あれは、アメリカがやった実験で、私の国はやってない」中国なんかは、「被害を強調するな。日本だってひどいことをしているじゃないか」と言っています。フランスやイギリスの国民は、遠くで実験していますから、「自分には影響ない、関わりのないことだ」と認識してると思えます。

核保有国が、核実験による影響が自分の国の国民も含め、世界の人類とか、生命に与えた脅威、環境を破壊したことに対する深刻な検証がされてない。これが核廃絶の道を止めている最大の理由の一つだと私は思っています。

世界中で行われた核実験によって、どれぐらいの人が世界でがんになったかということについて、正式なデータが示されていないのです。ただ、ヨーロッパ放射線リスク委員会の分析では、世界で約6,500万人ががんで死亡したというデータを示しています。それぐらい影響はあったと思われるのです。マーシャルも国連に訴え、イギリスも兵士が被害を受けたということで、ロンドンで裁判が行われています。60年過ぎて、被害を受けた側の人々による告発が今始まっているということです。高知も2016年に国賠訴訟を起こしましたが、これから展開を注視していただきたいと思います。

(やました まさとし 「ビキニ国賠訴訟を支援する会」共同代表)